

「じゃあ次、三十八ページ、八ッ橋読んで」

「おい、八ッ橋！ 指されてんぞ！」

クラスメイトの笑い声。でももう、そんなからかいにも慣れた。

古都京<sup>ふるいしげい</sup>。京都みたいだから、八ッ橋。高校生にもなって名前でもかろうとは……と呆れたのは最初だけ。二年も経てば気にもならない。立ち上がり、指示されたところを読み上げる。

セミが鳴いている。なんで鳴くのだろう。どうせ命は短いのに。

「じゃあ今日の授業はここまで。次回までに必ず復習しておくように」

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。やっと苦痛な時間が終わり、帰ろう——と思った瞬間、数学のノートを提出し忘れていたことに気が付いた。

(明日……よりは今日かな)

明日でも叱られることはないだろう。でも今日は早く帰ってもすることがない。卵と牛乳の特売は昨日だったし、今日は調理しなくても昨日の夕食の残りがあまる。それに今日は特に課題も出されなかったし、洗濯は———さえいえば明日の天気はどうだっただろう。本当は今朝のうちに終わらせてしまいたかったのだけれど、洗濯板が見つからなかったのだ。結局出掛けに倒れて棚の下に入り込んでしまったのを見つけてほっとしたのだけれど、その分明日の天気の確認が必要になってしまった。帰りに商店街の電気屋さんの前を通って天気予報の時間まで粘らなければ……と考えると、ニュースの時間を踏まえてもこのまま提出に行ってしまった方が効率的だ。

よし、と席を立つと、教室にはもう誰ひとり残ってはいなかった。皆予備校だの遊びだのと忙しいのだろう。合コンとかカラオケとか、よく楽しそうに話しているのを耳にする。お金も友達もゼロの自分には縁のない話だけれど。ガラリと大きな音を立てるドアを開けて廊下に出ると、校庭に面した窓の方からは楽しそうな声が聞こえた。

数学教諭の神谷先生は、授業がないときはいつも数学準備室で過ごしている。理由は知らないけれど、きつと職員室にるのが面倒なのだろう。最近では教職員同士でもいろいろある、

と誰かが言っていた。渡り廊下を歩き、別館の三階へ向かう。

「先生、三年の古都ふるいちです」

ノックをすると、先生はすぐにドアを開けてくれた。

「こんにちは。いらっしゃい」

「失礼します。数学のノート、提出忘れてて」

「ああ、そうか。そうだったね」

ノートを差し出すと、男にしては綺麗な手がそれを取った。

「オレンジジュース、飲んでく？」

「あ……」

先生は古都がここへ来る度にジュースを出してくれていた。他の生徒が来たときもそうなのは分からないが、さすがに全員に出すことはないだろう。そう思うと、毎回声を掛けてもらえているのはすごいことなのではとつい調子に乗ってしまいそうになる。

でもそれを当たり前と思いたくない。

「いいんですか」

「もちろん。どうぞ、入って」

目尻に寄ったしわ。そう思うと少し年配のように感じるけれど、実際にはまだ三十代前半のはずだ。きつと昔から今ののように穏やかに笑う人だったのだろう。たくさん笑顔を見せるから、しわが出来た。幸せの証の目尻。

「あ、さすが。今回もばっちりだね」

勧められたソファに座ると、先生も向かいに腰を下ろした。そしてジュースを出すより先に始まるノートのチェック。でもこれもいつものこと。先生は何より数字が好きだ、というのが生徒たちの中でのもつばらの噂だった。

と、言うのも、先生ははっきり言って見目がいい。短めで少し茶色がかった髪、綺麗な二重。鼻は少し大きめで、でも唇は薄め。背も高くて見るからに筋肉もあるのに性格は穏やかで、課題を忘れても決して怒らず、優しく注意するだけに留める。それに何より、たくさん褒めてくれる人。だから女子生徒の中では特に人気があつて、噂では毎月二人のペースで告白されているらしい。それだけ聞けば「嘘でしょ」と思ってしまうけれど、こうして先生を見れば本当のことのように思えてくる。

——なのに、独身。女子が尋ねると恋人もいないと答えた……らしい。なので「先生は人間よりも数字好き」という噂が広まったのだ。全部耳から一方的に入ってきた情報だけれど。

「古都の字は綺麗だね」

「普通ですよ」

「そんなことない。丁寧なだけでなく、漢字とひらがなのサイズの比率がすごく綺麗」  
これだ。こうしていつも、何かいいところを見つけ褒めてくれる。これがあるから人気なのだ。まあ、比率という言い方に「数学オタク」みたいな雰囲気を感じずにはられないけれど。

「あ、この問題もよく解けたね。ああ、そう、ここ、ここがひっかけなんだけどちゃんと気付けてる」

テーブルに置かれたノート。こちら側に向けられたので覗き込むと、一度消した途中式を指していた。

(綺麗な指……)

男性なのに指毛がない。ケアしているのだろうか。それに爪も短く切り揃えられているし、やすりもきちんと掛けられているように見える。触れても怪我をしない指だな、と思う。触れることはないけれど。

「計算式も答えもばっちり」

「……ありがとうございます」

果たして一度消した内容まで見てくれる先生が日本中に一体何人いるだろう。以前間違えたときは丁寧に消したところまで陽に透かし、どのように考えたのかまで読み取って、赤ペンで説明を入れて返してくれたこともあった。それほどまでに丁寧に指導してくれる先生は他にはきつといない。

モテるはずだよな、と思う。これで顔が不細工だったら——いや、でもそれを覆せるほど性格も優しい。花丸を書く手の動きを眺めていると、唐突に先生が立ち上がった。

「ジュース！ ごめんね」

小さな冷蔵庫から出されたばかりのジュースはいつもと同じ、子供向けのものだった。可愛いイラストの紙パック。先生は話し方も優しいので、まるで子供扱いをされている気分になってしまう。でもきつと先生がこれを選ぶ理由は簡単に飲みきれないサイズだからだろう。

「いただきます」

「はい、どうぞ」

笑顔で応え、先生は自分用のマグカップからコーヒーを飲んだ。それを見ながらストローを挿す。そういえば先生がコーヒー以外のものを飲んでいるところを見たことがない。この紙パックジュースも三本パックを今開けていたところだし、ということはやはりジュースは

生徒のためにわざわざ買ってきているのだろう。

「古都はさ、いつも挨拶ができて偉いね」

「……普通です」

食べ物、飲み物を出されたら「いただきます」と挨拶するのは当然のことだ。わざわざ褒めてもらうようなことではない。でも先生に褒められるのは嬉しいし、むず痒い。

「いいこだよ。いいこ。古都はいいこだね」

にこにこした先生の顔。その顔を見るとどうやら本当にいいこだと思われるようで、つい否定したくなる。

(違うのに……)

いいこなんかじゃない。先生が思っているような生徒じゃ——。

「あ、そうだおやつもあるよ。食べる？ お腹空いてない？」

言いながら先生が席を立った。デスク横のカバンから取り出されたのは小さな袋。

(ポーロ……)

それは幼い子供が食べるようなお菓子だった。少し黄色がかっていて、小さく丸い粒のもの。

「……いただきます」

「はいどうぞ」

飲み物以外をもらうのは初めてだった。ただお菓子を持っているタイミングだったけなのだろうが、なんだか特別に思えて嬉しい。

「古都はさ、兄弟いるんだっけ」

「あ——先生は……いるんですか。ご兄弟」

ちら、と一度先生を見てから質問で返す。それ以上家族のことは訊いてほしくなくて、誤魔化すようにお菓子の袋を開封した。手の上で傾ければ、コロんと丸い粒が転がり出る。見るだけで可愛らしい形状。

「先生、面倒見がいいから弟妹がいそうですね」

意識を戻し、質問が繰り返されてしまう前に明るめの声で続ける。幸い、質問の答えを誤魔化したことには何も言われなかった。

「ううん、一人っ子。本当は弟がほしかったんだけど、こればかりはね」

「そうなんですか」

意外だった。面倒見がいいのでつきり年の離れた弟妹がいるものだと思っていた。

「うん。まあさすがにもう兄弟は諦めたけどね」

それはそうだろう。むしろ自分の子供を持つ年齢だ。

「……そういえば、先生ご結婚は」

「してないよ。ずーっと一人」

そうなんですか、と言っていいのだろうか。コミュニケーション能力の高いクラスメイトなら一体何と返すのだろうか。

「えー、もったいない」とか「嘘だ!」とか「遊びたいから特定の相手作らないようにしてるんでしょ」とか……でもどれも言えそうにない。

「……したいって思いますか」

失敗したな、と言ってから気付く。これでは家族の話に戻ってしまう。

「結婚に興味はないんだよね。結婚っていうか、戸籍っていうか。好きなら籍にこだわらなくても一緒にいるでしょ」

「……まあそうかもしれないですけど……」

でも、実際にはたった一枚の紙切れである籍の効力はすごい。日本の制度的なことはもちろん、世間からの信頼についてもガラリと認識を変えてくれる。

(同じ戸籍でも……縁を切られてしまえばそれまでだけ——)

「古都は？ 結婚とか興味あるの？」

「僕は……僕もありません。一生したくないです」

「なんで？」

「あ……」

やってしまった。家族の話は嫌だったのに。

「いえ……これ可愛いですね」

話しながらもう一粒。我ながらかなり強引な話の変え方だと思うけれど、元々コミュニケーションは上手くない。こんなに話せているのは相手が神谷先生だからだ。

けれど先生はにこりと笑った。

「懐かしいでしょう」

「……はい」

子供の頃に食べた記憶のないお菓子。でも、そんなことを正直に言う必要はない。子供用だと思っていたけれど、この年になって食べても美味しいものだな、ともう一粒口に放り込むと、お菓子は唾液でじゅわりととけた。

その間、先生は何も言わなかった。ただ目を細めてこちらを見ている。  
「先生？」

「……美味しそうに食べるなと思って」

「はい、初めて食べましたが——」

しまった、と思った。言わないつもりでいたのに。

~~~~~

2

「起立、礼、着席」

「では六十ページを開いて」

ぼうっと窓の外を眺める。昼食後すぐの授業はとても眠い。腹五分目までしか食べていなくてもこれだけ眠くなるというのは一体どういうことなのだろう。

それにしてもうるさいほどの大雨だ。しかももう長いこと降り続けている。昨日の下校時にはすでに降っていたし、恐らく夜中も止んではいなかった。梅雨とはいえ、極端な雨だった。

「ええっ！」

「なんだ、どうした」

突然のクラスメイトの大声に教師が反応した。クラスメイトも皆何事かと声を上げた生徒の方を向いている。

「や、大雨警報と、洪水っていうか、駅前が氾濫危険水域になったみたいです」

「本当か」

授業中に携帯を弄ってはいけない——そう叱ることもなく、教師は念のため荷物をまとめておきなさいと言って大慌てで教室を出て行った。その先生の様子に、一気に教室内がざわつく。

「うわ、マジじゃん。やば。あそこ氾濫したら電車止まるよな？」

「確実に。今すぐなら帰れそうだけど、このまま降り続いたら帰る方が危ないかも」

皆続々と携帯でニュースの確認を始めた。どうやら家族から心配する連絡が入っていた者も多いらしい。最初は多かった大声も次第になくなり、いつの間にか不安げな空気が漂い始める。

「マジで帰る準備しとくか……」

「あ、ああ……」

最近の豪雨。平均的に降るのではなく局地的な大雨によって災害も増え、学校もかなり過敏になっている。

(そういえば災害用品の備蓄担当って神谷先生だったよな……)

以前そう聞いたことがある。何かあれば避難所として使われることになるので、毛布や飲料水などの在庫や消費期限等の確認をたまにするのだ、と。だからもしかしたら今頃、備蓄在庫の確認をしているかもしれない。もし方が一のことが起こったら、先生は学校に残ることになるのだろうか。それともきちんと間に合ううちに帰宅することができるのか——いつの間にか、気が付くと先生のことを思い浮かべるようになってしまった。そんなこと、考えなくてもどうしようもないというのに。

心配してくれる家族はいないが、別に自死願望があるわけでもない。とりあえずいつでも帰れるようにしておくか、と荷物をまとめ始めると、財布がなくなっていることに気が付いた。

(なんで……?)

自転車の鍵は財布に入れていた。今朝通学してきたときも同じように小銭入れに入れた覚えがある。雨に気を取られカバンに戻す際に落としたのか、とロッカーや机の中、ポケットまで探してみるが、どこにもない。

「あれ、八ッ橋どうしたの？」

顔を上げると、目の前ににやにや笑うクラスメイトの顔が三つあった。名前は覚えていないので分からないが、古都を「京都みたいな名前だから」という理由で「八ッ橋」と呼び始めたのは真ん中の男だった。

「別に」

「え、でも何か探してるじゃん」

「別に」

「なくしものしたなら一緒に探してやるよ」

「あ、もしかしてピンク色の子供みたいな財布？ マジックテープのやつ」

「馬鹿、それ言ったらバレバレじゃん」

ゲゲヘという汚い笑い方。周りも関わりたくないのか、それとも無事を知らせる連絡に必死なのか、口を突っ込んでくる人もいない。

「返して」

「え？ 知らねえなあ……どこかに落としたんじゃねえの？」

どう考えてもこいつらが盗ったのだ。それなのににやにやと卑卑た笑いを隠しめせず知らないとのたまう。

「返して」

あの財布には家の鍵も入っている。自転車はなくても歩けばいいが、家の鍵も現金もないとなると生活ができなくなってしまう。

「だから知らねえって」

あはははは！ と三人が笑っているとガラッと大きな音が聞こえた。視線をやると教師が肩を上下させながら入室してくるところだった。

「緊急下校が決まった。今ならまだ電車も動いているし、氾濫もしていない。駅までは教員が付き添うので、急いで昇降口に向かいなさい」

教師としても生徒の命が掛かっているので必死なようだ。男子生徒については背中を押すようにして教室から追い出していく。

「八ッ橋！ 八ッ橋も早くしろ！」

「先生、」

財布が——と口を開いても例の三人が「先生、俺らバスなんだけど」と意識をそちらに向けさせてしまった。

(仕方ない)

さすがに捨てるようなことはされていないだろう。それに教師も人命優先。でもこのままでは帰れないので、帰るふりをして数学準備室に向かった。

「失礼します」

ノックをしても応答がなかったので扉に手を掛ける。鍵は開いていたが、そこに先生はいなかった。本当に備蓄庫にいるのかもしれない。もしくは駅やバス停までの付き添いに出ているのか。

学校に泊めてもらうのなら備蓄管理の先生に言う方がいいだろうと思ったのだけれど、いないのなら仕方がない。とりあえず財布を探すことにして、廊下を歩いた。

「あれ、古都？」

「——先生」

新校舎を全て見終わり、旧校舎に向かう渡り廊下で掛けられた声。振り返ると先生がいた。

「どうしたの？ なんでここに？ 全員下校になったよ」

「あ、はい……そうなんですけど」

先生が足早にこちらに近付いてきた。隣に来たところで共に歩き出す。説明するのも大事だけれど、少しでも早く財布を見つけて安心したい。

「財布なくしちゃって」

「財布？」

「はい。家の鍵が入ってて」

きよろきよろしながらゆっくりと廊下を歩く。子供の頃に近所の人からお下がりでもらった蛍光ピンク。目立つので、落ちていれればすぐに気付くはずだ。

「——それ、本当に落としたの？」

「あ……まあ」

もしかしたら本当に落としたのかもしれない。校内で財布を使うことはないけれど、駐輪場に自転車を停めた際には必ず取り出す。だからそのときに目撃されていれば、他人に財布の特徴くらいは知られていても不思議ではない。

「どんな財布？」

「え」

「一緒に探すよ。ないと困るでしょう」

「すみません。でも、先生忙しいんじゃない？」

「教師も数人を残して帰るよ。俺は残るけど」

「あ、備蓄担当だから……」

「そう。よく覚えてたね。何かあったときに避難所になるからとりあえず残っておかないと」

やはり残らないといけないのか。帰れたらいいのに、大変だ。でも先生が残るなら方が一すぐに財布を見つけれなくても安心して学校に残れるな、と思った。

「あの、僕も残っていいですか」

「え？」

「鍵ないと帰れないし……」

「ご両親が心配するよ」

「あ……」

やはり一人暮らしということを知らないのだろう。最近話題の個人情報というやつだろうか。

「僕一人暮らしなんです」

「そうだったんだ」

「はい。だから別に……ってというか、鍵がないと帰れなくて」

「そっか」

先生は「どうして」とは訊かなかった。ただ「そっか」と言って、一緒に校舎内を歩いてくれた。旧校舎はあまり来ることがないので少し新鮮。でもやはり古いので、激しい雨の音が少し怖い。遠くでは雷も鳴り始めたようだった。

（先生が声かけてくれてよかった……）

まだ十三時過ぎだというのに外は暗い。まるで夕方のような暗さだった。それだけで不気味だというのに、この旧校舎の雰囲気。湿気もひどいし、まるで学校の怪談に出てくるような。もしこんなところに隠されていたら嫌だな、と思いながら歩いていると、先生が神妙な声を出した。

「……そういえば知ってる？」

「はい？」

「ここ。なんで使われなくなったのか」

「え、古くなったからじゃないんですか」

先生の普段とは違った様子に、意識がそちらに向く。この暗い雰囲気に押されているのか、財布が見つからない不安と相まって心細さがつのる。

「まあそれもあるんだけど。昔さ、ここで幽霊を見たって声が多く出て」

「え……」

思わず足が止まった。だって、今まさに同じようなことを考えていたのだ。

「最初は生徒の中でただの噂話だったらしい。ほら、よくあるでしょう、昔ここで自殺した生徒の霊が……って」

「え……え」

初めて聞いた話だった。でももしかしたら生徒は皆この噂を知っているのかもしれない。ただ、友達がいらない自分が知らなかっただけで。

身体から体温が奪われていく。怖い。だって、自殺した生徒の幽霊――。

「……古都？」

「あ、や……」

足が竦んでいた。だって幽霊なんて。見たこともないけれど、怖い。もし見てしまったら――。

「古都」

「あつ」

きゅつと握られた手。温かなそれに、冷たくなった指先に徐々に血が通い始める。

「大丈夫？」

「あ……や……幽霊……？」

怖い。どうしよう。先生がいるから大丈夫なはずなのに、一体どうして急にこんな話を始めたのだらうと思うと——もし、何かを見かけたことでそんな話を思い出したのだとしたら。

(怖いっ……)

目を閉じたい。見えてしまう前に遮ってしまいたい。でも、目を閉じて近くにソレが来たことに気付けなかったら——どうしたらいいのか分からずにいると、先生が表情をふつと緩めた。

「古都、その自殺した生徒ってのはただの噂っていうか嘘だよ。そんなことはなかったから大丈夫」

「あ……そうなんですか？」

その言葉に、肩から力が抜けていく。

「うん。まあ俺が教師になる前から噂はあったみたいだけど、ここでそんな事故は一度もないよ」

確かに、先生の年齢は上に見てもせいぜい三十五歳。特別若く見えるタイプっていうのであれば三十歳前後だろう。何年前からこの学校にいるかは分からないけれど、それほど昔のことをリアルに知っているとは思えなかった。

「調べたんですか」

「まあ、ちよつとね。って言っても検索掛ければ分かることだし、図書館で古新聞漁るのも嫌いじゃないし」

「そうなんですね」

なんだ、それなら怖くない。きっと怖い話が好きな生徒が友達とそういう話をして、それが少しずつ噂として広まっていったのだろう。

ほつとしたのが分かったのか、握られていた手が離れていった。それが寂しくて、せつかく浮上した気持ちが少しだけ落ちる。

「で、それは嘘なんだけど」

「……え」

もしかしてまだ続きがあるのだろうか。怖くて、でも先生の話なら聞いてみたくて、聞き

流そうと意識しながら聞く。

「幽霊を見たっていう噂は結構普通に聞くんだよね」

「え……」

「学校が墓地の跡地に建てられることがあるっていうのは知ってる？」

「あ……はい、なんとなく」

「広い土地が必要だからと聞いたことがある。」

「あれって完全な嘘ってわけではないんだけど、そんなに多くないんだ」

「そうなんですか」

「ただここは、本当だよ」

「え」

「体育館の建て替えのとき、掘ったら人骨が結構出たらしい」

「え……や、あの……」

怖い。いや、でも人骨が出たというだけなら——だって、日本の歴史を思えば人が亡くなっていない土地なんてないのだ。

「まあ、それがこの旧校舎の幽霊騒ぎとイコールで繋がるかと言うとそれは分からないけど……」

言いながら、先生がガラッとドアを開けた。使われていない美術室。カチという音と共に電気が点いた。しかし暗い。切れてしまっている蛍光灯が数本。切れかかっているものが一本、チカチカと点滅を繰り返している。この部屋に入るのか、と思うとそれだけで怖かった。けれど先生はゆっくりとした足取りで、床をきよろきよろしながら進んでしまう。先生は自分のなくしものを探してくれているだけなのだ。頼りつきりではいけない、と先生の後について入り、壁際の棚に置かれた彫刻を見ながら財布を探す。でもやはり見当たらない。あの三人はどこにやったのだろう。まさか本当に捨てられてしまったのだろうか。

教室の半分ほどを見終えたところで、先生が屈んでいた腰を起こした。

「不思議だと思わない？ ここ、まだ使えるのになんで新校舎に美術室を作った？ 旧校舎を取り壊すっていうなら分かるけど、旧校舎の一部はまだ使われている。先生たちもそれに使ってるしね。確かに古いけど、もちろん倒壊の危険だってない。なのに、美術室は二つある」

「せん……」

怖い。話の内容自体も怖いけれど、普段にこにこしながら優しい口調で話す先生がこんな

にも低い声で淡々と——まるで怪談話をするときのような声色で話す違和感。それだけでも、イレギュラーな世界に入り込んでしまったかのような錯覚に陥る。

外はまだ大雨が続いている。バケツをひっくり返したような勢いで騒音を立てている。そういえば、どうしてこんなに先生の声はクリアに聞こえるのだろう。雨音で床のきしみも聞こえないくらいなのに。雨と、先生の声以外にも聞こえない。

先生がここにいるのは古都の財布を探すため。迷惑をかけているのだから早く見つけなにと——そう思うのに、上手く身体が動かない。まるで金縛りにあったような、そんな違和感を覚える。

「……古都」

「あ……せん……」

話せる。口は動くし声も出せる。手に力を入れれば、ゆっくりと指も曲がって拳を握れた。

「噂の発生元はここだよ。この美術室に出るらしい」

少し離れた位置から聞こえる先生の声。やはりクリアだ。おかしい、と思った瞬間視界が真っ白になった。ハッとする間もなく、ドオオオン！ と地面を割るような音と振動が身体を揺らした。

「あああああああああ！」

頭が真っ白になった。蹲り頭を抱える。

「古都！」

ほとんどパニックのような状態で、目からは勝手に涙が落ちた。タイミングの良すぎる、まるで計ったかのような先生の発言と落雷。驚きと恐怖でわけが分からなくなる。

「やあああ！」

「古都！ 大丈夫、古都！」

「やあああああ！」

怖い怖い怖い。もし目を開けて幽霊がいたら。ここに出るのがどんな霊かも聞いていないのに、頭の中にはこの学校の制服を着た黒髪の女の子の姿が浮かんでいる。

「ひいいいっ！」

なんで勝手に顔が浮かぶのだろう。見たことのない女の子。なのにまるで知っている人のようにくつきりと浮かぶ。

「ああああ！」

「古都！ 古都、大丈夫、俺だよ」

すぐ近くから聞こえる先生の声。その声は安心できるものなのに頭の中から女の子の姿が消えなくて。動いたら女の子にバレる、とわけも分からずそう思った。怖い、どうしよう、ここにいることがバレてしまう——女の子がいるのは頭の中なのに、なぜかそんな風に思う。「やあああ……」

怖い。なんで。この女の子は一体何なのだろう。少しずつ近づいてくる。バレた。ここに  
いることが、女の子に。

「古都！」

一際強く呼ばれた瞬間、身体がぬくもりに包まれた。

~~~~~

3

翌日——。

困ったな、と思ったのは就職についての説明を担任から聞いたときだった。就職するとき  
に保証人が必要だなんて知らなかった。

(だって普通……社会人になったら大人なんじゃないのかな……)

勝手にそう思っていた。会社勤めが始まれば大人として認識されるのだから保証人なんて  
不要だろうと。

「どうしよ……」

自転車に乗る元気もなく、まだ少し水滴の残る自転車を押して歩く。

保証人になってくれるような人は一人もない。両親はもう連絡先すら分からないし、親  
戚付き合いについても何も知らない。

一瞬浮かんだのは先生だった。しかしこれ以上迷惑を掛けることはできないし、そもそも  
担任でもない先生が保証人になれるものなのかも分からない。保証人になってくれた人に迷  
惑を掛けるようなことはしないつもりだけれど、もし職場で体調を崩したときの連絡先とし  
て使われてしまうようなものだったとしたらそれは確実に迷惑になる。無断欠勤を続けたと  
か会社に莫大な損害を与えるようなミスを犯したとか、自分で防げることならしなないが不可  
抗力ではどうにもならない。そう思うとやはり先生に頼むことはできなかった。

(どうしよう……)

どうしたらいいのだろう。進学するにも学費はないし、自分で生活費と学費を稼ぎながら  
通う自信はない。それに、大学に行くのだから保証人は必要だろうし、そもそも大学を出た

からといって保証人が不要になるわけでもない。それならやはり当初の予定通り高卒で就職するべきだ。しかし保証人を頼めるような相手がいない。

(生きるって大変……)

日本に産まれた時点で恵まれているとは思う。でも、一人で生きていくには生きにくい。無保険、家族なし、高卒——雇ってくれる企業があるとは思えなかった。それでも仕事をしなければ生きてはいけない。担任に相談してみようかと思っただけ、担任は実家の引越に伴い一人暮らしをしているということくらいしか知らないだろう。まさか捨てられ、連絡先も変えられてしまっているとは思っていないはずだ。

「はぁ……」

どうやって生きていけばいいのだろう。それとももうこれで手詰まりなのだろうか。

(日本だからなあ……)

これがアフリカだったら、きっとそんな風には思わなかっただろう。何かしら生きる術があつて、子供でも懸命に働いて。でも日本は働く場所さえもらえない。そのチャンスさえなくなってしまう。

足を止める。胸の痛みがひどすぎた。でもこれは慣れないといけない痛みだ。別に病気ではない。ただ、悲しい思いをしたときに痛むだけ。子供のときからずっと付き合っている痛みだし、少しずつ痛む頻度も減ってきた。きっとあと一年もすればもっと悲しみに慣れ、痛まなくなってくるだろう。

生きていれば、の話だけれど。

屋根もない駐輪場に自転車を片付け自室に入る。先生の家に泊まったのは一昨日から昨日に掛けての一泊だけだったのにやけに長くいたように感じられていた。それに、明るかった。こんな幸せな時間があるんだ、と思えるほどの時間だった。でもその分、一人の部屋は暗く、寂しい。

(でもこれが自分の家……)

前編約4万6千文字

宜しく願っています。

someone